

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

苦悩

例の2人組は前日とは違い、閉店近くまで粘り、2人で1万5千枚ほどを換金していった。これで2日間での出玉は2人で3万枚を越えている。従業員やお客さんの鋭い視線は、もはや店長だけに向けられるものではなく、設定を打ち込んだ私にも向けられていた。ほとんどホールに出ることもなく、お客さんどころか、従業員とさえたまにしか顔を合わさない店長だから、この結果にも無理はない。また、店長に意見ができる存在など、私とT副主任だけなのでなおさらである。

皆が閉店作業を終えるころ、私は事務所に向かった。明日の設定表を店長から預かるためだ。事務所に入ると、店長は不在だった。いつもなら出かけるときは私に声をかけていくが、さすがに声をかけにくかったのだろうか？ しかたなく勝手に設定表が隠されている秘密の引き出しを開けてみる。そこには既に明日の日付の設定表が置かれていた。まさか、明日も来るのか？ 機種別になっている設定表、1枚1枚を慎重にめくっていく。「6」という数字に敏感に反応してしまう。そして発見してしまった、6の並びを……。思わず息を呑み、固まってしまった。脳裏に店長の顔が浮かんだが、それは到底、人の顔と言えるものではなく、また動物的なものでもなく、全く別の生命体のような、そんな感じだった。（あの店長は店のことなど考えて

いない。それとも本気で気付いていないとでも思っているのか？ これがこの業界では普通なのか？ いろいろな憶測、思考が頭をよぎる。今まで白いものを白いと言い、黒いものを黒いと言ってきた。それが自信でもあり、自慢でもあった。しかし今回は言えるだろうか？ 昔にはなかったものが今はある。人として最も守らねばいけないもの……。家族である。ただ正義を貫くという理想だけで、もっとも大切なものを犠牲にしているのだろうか。いや、それより、店長に取り込まれ、出世を目指し、いずれこの店舗の責任者になり、真面目で誠実な営業を目指した方がはるかにマトモでマシなのではないだろうか。きつとそれが一般的であり、普通なんだと思う。それでも一度取り込まれてしまったら、自分も同じことをしてしまいうるで怖い。

「もう設定いれた？」
「いえ、今からです。あと、連日で6に並んで座る2人組ですが、さすがに偶然とも思えません……」
「お前が設定情報を漏らしてなければ偶然なんじゃない？ ヒヤハハ」
「……。まあ、まぐれは3度続かないと言いますから、明日は大丈夫と思います」
「ま、いいや。じゃ、後は頼んだぞ。」
店長はそう言い、事務所をあとにした。とりあえず布石は敷いてみた。あそこまで言えませんが、明日は大丈夫だろう。

入魂

一応敷いた布石。普通の人ならさすがに3日目はないと思う。いくらその計画で6を2台並べても、計画は中止し、「明日はやめておけ」と言うのが極めて一般的に感じる。

設定表を持ってホールに出ると、従業員が話しかけてくる。「明日もですか？」と。「いや、明日は大丈夫」そう答えると彼らは少し笑顔をのぞかせて、足早に去っていった。それでも実際は、設定表には6が2台並んでおり、その事実は変えられない。その並んだ2台の設定表を入れるときはさすがにためらう。明日は「ブラネット999」なので、それほど爆発するとも思えないが、不安は完全には拭えない。出ないでくれよ、と願いながら私はその2台を6にした。設定表に書かれたものを勝手に変更することは私にはできなかったのである。さて、明日は早番だ。はたして例の2人組はくるのだろうか？

成敗

次の日、少し早めに出動し、一人もくもくと開店準備を進めていた。いまのところ外には例の2人組の姿はない。来ないだろうと思いつつも、気になって仕方がない。

開店時間の9時ちょうど、メインのドアを開け、お客さんに入店してもらった。

都合のいいことはないだろうか？

終焉

夕方4時、例の2人組が席を立つ。どうやら止めるようだ。獲得メダルは2人合わせて0枚。投資を散々繰り返し、とうとう諦めたのだ。止めた2台には、常連たちが待つてましたと言わんばかりに飛びついた。しかし出なかった。夜になっても、疑惑のその2台には常連たちが入れ替わり立ち代り取り合いをしたが、誰一人として出したものはいなかった。従業員たちは私に言う「副主任、やってくれたんですね？ 騙してやっただんですか？」と。従業員たちは私が、設定表どおりに設定を入れなかったと思っただろう。しかし私は間違いなく設定表どおりに入れている。これは結果的にプラスに転じた偶然だ。

最後は事なきを得たが、店にとつてのダメージはとてつもなく大きい。信頼を失ったのだ。ほんの数回の出来心で支払った対価はあまりにも大きい。従業員のなかでも危険な発言が飛び出す者もいた。「副主任も設定の横流し、やればどうですか？」しかもこの発言は一般従業員ではなく、班長の発言だ。とても危険である。いままでいい雰囲気の中、いい状態で店が成り立ってきたと思っていた、それがたった3日で吹き飛んでしまった。この復旧作業はいつまで続くのだろうか？ 私はこのままここで頑張れるのだろうか？ 疑問と不安が私を覆いつくしていた。

次の日、T副主任と顔を合わせた私は暫く2人で話し込んだ。この度のこと、今後のこと、いろいろ話し合った。そして最後にT副主任は私に言った「あの2台、6でした」。

それが本当なのか嘘なのか、この際どちらでもいいが、それを聞いて、この人はやはり信頼できる人だと強く感じたのであった。

遅番の従業員たちが出勤してきて

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

ぞろぞろと入店していくお客さんの中に、例の2人組の姿は……。ない！ ホッと胸をなでおろす。今日から平穏な店に戻りそうだ。安心して事務所に戻る。ザ、ザザー……。副主任、例の2人組が来ました「事務所に戻った矢先のインカムはさつきまでの安堵感を反転させる、最も嫌な内容だった。カメラにて事務所からその2人組の様子を窺ってみる。間違いない、例の2人組だ、そして彼らは迷いなく、その2台の6に並んで着席している。今回、この設定を知っているものは2人だけ、私と店長のみだ。これは間違いないこと。ならばやはり店長、犯人は店長だ。私からの苦言も聞かず、この有様。いったいどういうつもりなのか。もはや私には店長を理解できるものなど何一つない。すでにお客さんの2人組に対する視線は極めて厳しい。刺さるような視線である。もちろん私に対す

る視線も厳しい。もうすでに、店に対する信頼は風前の灯と化している。信頼を失うのは簡単だが、取り戻すのはとても難しい。これは当然の報いである。それでも店長は何事もなかったかのようになり、いつもの高笑いを繰り返すのだろう。はつきり救いようがないと言える。そして私にはもう救う気もない。

重苦しい雰囲気の中、時間だけは確実に進んでいった。入れ替わり立ち代りで、常連たちが、例の2人組の様子をうかがっている。私も頻繁に彼らの様子を注視していた。1時間、2時間、3時間……。経過し、時計はお昼を過ぎた辺り、常連たちの様子は相変わらず、彼らを見張っていた。そして彼らも相変わらずもくもくと遊戯している。さらにもう一つ相変わらずなことが存在した。それはまだ、彼ら2人組が現金投資をしていることだった。間違いない。2台とも設定6だが、全く出ていない。6だと分かっているから余計に投資に迷いが無い。どうやら神様は見放さなかったようだ。出ないという事実が、多少のブラフになつてくれている。常連たちの鋭く刺さるような視線も若干和み、さつきまで完全に無視だった私に対し、話しかけてきた。

「あれ？ あの2台って6じゃないの？」
はいそうです、などと口が裂けても言えず、「分かりません」の一点張りだった。いずれにせよ、この2台が設定6なのは事実、いつ炸裂しだしても不思議ではない。神様はいつまで頑張ってくれるだろうか？ このまま1日出ないなんて